

## プロローグ ロラン・バルトの死

ロラン・バルトは一九八〇年三月二六日に亡くなった。自動車事故のあとに再発した肺の疾患に加え、病院内でよくある、命にかかわる感染症に罹ったのだ。おそらく、それが直接的な死因だったのだろう。バルトは、エコール通りの横断歩道で、モンルージ〔パリの南西に隣接する町〕から来たクリーニング屋の小型トラックに轢かれて亡くなったのだと、多くの人は記憶している。それもまた事実である。二月二五日、およそ一年後の大統領の任期満了に関係していたかどうかは不明だが、ジャック・ラングが企画した昼食会からバルトは帰るところだった。後に文化大臣となるラングは、つねにフランソワ・ミッテラン大統領の周辺に重要な知識人や芸術家を集めようとした。あるいは、それを望んだのはミッテランの方で、彼はラングに頼んで定期的にそのような談話の機会を設けさせていたのだろう。まもなく十六時になるところだった。バルトは徒歩でラン・マントー通りからノート・ダム橋を渡り、モンターニュ・サント・ジュヌヴィエーヴ通りを戻って北上し、エコール通りに着いたところだった。モンジュ通りとの交差点からはそれほど離れていない。バルトは右手の歩道を歩き、アウトドア商品を扱うヴュー・カ

ンプールのあたりにさしかかっていた。そこでバルトは通りを渡って左手の歩道に向かおうとしたのだ。バルトはコレージュ・ド・フランスに向かっていたのだが、授業のためではなかった。ブルーストと写真に関する次のセミナーでプロジェクターを使うつもりだったバルトは、機材のチェックをする必要があった。ベルギーナンバーの一台の車が二重駐車をしていた。そのために彼の視界は一部遮られていた。それでも彼は渡ろうとし、事故が起こった。軽トラックの速度はそれほどでもなかったが、それでも十分すぎた。衝撃は甚大だった。彼は道に倒れこみ意識を失った。クリーニング屋は車を止め、一時的に交通が渋滞し、救急隊と警察がすぐに現場に駆けつけた（モペール通りに警察署があった）。負傷者はコレージュ・ド・フランスのカード以外に身分証明書を持参していなかった。そのため、正面のコレージュに問い合わせに行く。誰かがロラン・バルトだと確認した（ミシェル・フーコーだったという証言もいくつかあるが、実際には長年のバルトの友人でソルボンヌ大学の教授ロベール・モージだった）。バルトの義弟ミシェル・サルゼド、そして友人のユセフ・バクーシュとジャン・ルイ・ブット

に連絡が入った。彼らはバルトが搬送されたピティエ・サルペトリエール病院に向かった。かなり動揺していたものの意識ははっきりしているように見えた。骨折箇所は複数にのぼったが、深刻なものではなかった。いくらか安心して三人は帰宅した。

当日の朝、バルトは頼まれた昼食会へ向かう支度をしていった。いつものように、午前中は書齋で仕事をした。その時は、翌週開催されるミラノでのシンポジウムの講演原稿を作成していた。それはスタンダールとイタリヤについての講演で、「人はつねに愛するものについて語りそこなう」というタイトルだった。この考察は、彼がコレージュで終えたばかりの「小説の準備」に関する講義にも通じるものだった。講義の中でバルトはスタンダールにおける日記から小説への移行について言及していた。スタンダールは、日記のなかで、イタリヤに対する強い愛情を語ることができなかったが、小説『パルムの僧院』でそれを果たしたのだ。「旅日記」と『パルムの僧院』との間で生じたことはエクリチュールです。エクリチュールとは何でしょう。長い通過儀礼の後に得られると思われる一つの力です。愛の想像物の不毛な不動性を打ち破り、愛の体験に象徴的な一般性を与える力です」。タイプライターで原稿の一ページ目と二ページ目の冒頭を打ち、バルトは身支度にとりかかった。なぜあの昼食会への参加を承諾したのかは彼にもわかっていなかった。記号や世界の動向に対する関心から、バルトはすでに一九七六年一月に、エドガールとリュシーのフォール夫妻宅でのヴァレリー・ジスカール・デスタンとの同様の昼食会に参加していた。友人の中には、右派への忠誠だとしてこの

昼食会へのバルトの参加を非難するものもいた。だが今回の昼食会に関しては、彼も彼の周囲も共感を示し、参加は自然なものだった。それでも当時チュニジア大使だったフィリップ・ルベロールには、ミッテランの政治キャンペーンに巻き込まれたかもしれない、とバルトは漏らした。会食者には誰がいたのか。かつてのフランス人民戦線の議員だったフィリップ・セールはその場にはいなかったが、この昼食会のためにアパルトマンを貸していた。ビエーヴル通りのミッテランのアパルトマンはこの種の招待にはあまりに小さすぎることがわかったからで、その上、実際のところ、それは未来の大統領であるフランソワ・ミッテランのものというよりも妻ダニエルのアパルトマンだった。昼食会には作曲家のピエール・アンリ、女優のダニエル・ドロルム、パリ・オペラ座の監督ロルフ・リーバーマン、歴史家のジャック・ベルクとエレヌ・パルムラン、それからジャック・ラングとフランソワ・ミッテランが参加していた。他にも会席者がいた可能性はあるが、その名前を直接記憶している者はいない。ミッテランは『現代社会の神話』〔「神話作用」〕の大ファンであったが、昼食に同席していたこの知識人の他の著作はおそらく読んでいなかった。とても愉快な会食で、フランスの歴史についてのニュアンスに富んだ表現や気取らない笑いを引き起こす冗談で彩られていた。バルトが発言することはほとんどなかった。会食は十五時頃に終わった。バルトはコレージュ・ド・フランスまで歩いていくことに決めた。時間はあったし、前日チュニスから到着したルベロールとの約束は午後

の終わりだったからだ。事故は、コレージュに到着する直前で

おこった。

ロラン・バルトはピティエ＝サルペトリエール病院で目を覚ました。弟と友人たちがいた。フランス通信社の最初のニュースが二〇時五八分に発表された。「大学人、エッセイスト、批評家のロラン・バルト、六四歳が、月曜午後五区のエコール通りで自動車事故にあった。当局の発表で、ロラン・バルトはピティエ＝サルペトリエール病院に搬送されたことがわかったが、健康状態に関しては二〇時三〇分の時点で何の情報も発表されていない」。翌日一二時三七分のニュースははるかに安心感を与える内容だった。「ロラン・バルトは変わらずピティエ＝サルペトリエール病院に入院している。病院側によれば、バルトは観察下にあり病状に関して進展はない。担当の編集者は作家の健康状態は不安を引き起こすようなものではないと述べている」。これはフランソワ・ヴァールによる過少評価だとロマリック・シュルジュール＝ビュエルは当時述べていたし、現在でもフィリップ・ソレルスはそのように断言しているが、そうだろうか。病人の状態は驚くべきスピードで悪化していったということなのか。二つの要因が作用したと考えられるだろう。最初、医師はさほど心配していなかったが、おそらく患者の肺の深刻な状態を十分に考慮に入れていなかったのだ。十分に呼吸ができないことから気管挿管の処理がなされた。その後、気管切開術がほどこされ、それがバルトをさらに衰弱させることになった。ソレルスは『女たち』の中でこの事故をより劇的に描いている。バルトは、ヴェルトという名で事故の直後に登場する。救命救急の機器があちこちに装着されていることが事故

の衝撃を物語る。「もつれたコード。管。ボタン。赤や黄色の点滅……」。その場にいた多くの人間は、不意の出来事を前にした恐怖とともに、避けがたい運命だったのだという感覚も覚えた。「いまでも晩年のヴェルトの姿が目に見え、ちょうど彼が事故に遭う前のことだ……母はその二年前に亡くなっていた、彼の大きい愛……唯一の愛だった……彼はますます青年たちのもつれた関係のなかにずるずると滑り込んでいくばかりだった、それは彼の性向だったのだが、速度を急に速めたのだ……もう彼の頭にあるのはそのことだけだった、一方で、絶縁を、禁欲を、新生を、書くべき本を、やり直しを夢見ながら……」。バルトはもう精根尽きていて、彼のところにくるあらゆる要求に応えることができない様子だった。バルトの青年たちへの依存を遠慮して口にしなかった友人や近親者ですら、バルトが依頼、手紙、電話などの重圧に押しつぶされそうになっていたと主張している……「彼は断ることができない人だった。うんざりさせられるようなことほど、やらなくてはならないと思っていた」とミシェル・サルゼドは言葉少なに語ってくれた。振り返ってみて、母を失った大きな悲しみ以来バルトは少しずつ死に身を任せていったという仮説を口にする者もいた。この仮説はあまりに心理学的すぎるか、あるいは、一つの存在をよく出来た物語に仕立てるための作り事である。バルトが感じていた疲労が悲しみのために増し、ほとんど鬱状態になってしまったというのは十分に考えられる。しかしバルトはけっして、母と天国のような場所で再会できるなどとは信じていなかった。たとえ友人のエリック・マルティの目をじっと見るバル

トの眼差しが、「まるで死に囚われているかのような」<sup>⑤</sup>絶望感を伝えるものだったとしても、当時のバルトが自ら進んで死に身をまかせることはなかった。懸命に戦っている様子が見えないからといって、死や病がもたらす休息に身を任せているわけではない。バルトの死に関してミシェル・フーコーがマチュー・ランドンに語ったように、病院で生き延びるためにどれほどの努力が必要か誰もわかっていない。「死に身を任せるとは、ありきたりな入院状態のことを指す<sup>⑥</sup>」。生き残るためには戦わなくてはならないのだ。フーコーは独自の解釈を交えながら次のように続けた。「実際とは反対に、バルトは中国の賢者のように、長い幸福な老年だと思われているのではないか」。自身をオルガという名で、ロラン・バルトをアルマン・ブレアルという名で登場させた小説『サムライたち』の中で明確に描かれているように、バルトは意志的に死ぬことを選んだ、というのがジュリア・クリステヴァがバルトから受け取った印象である。彼女のその印象は今日においても変わってはいない。彼女と非常に深い関係を結び、彼女のことを心から賞賛し、博士論文審査の審査長をつとめ、一九七四年の中国旅行に同行してくれた人はもう彼女に語りかけてはくれない。クリステヴァはバルトの声を思い起こしていた。彼の目は諦念を物語り、その身振りは別離を示しているように思えた。「生への拒否がヒステリーになることなく表明される時、それ以上に説得力をもつものはない。いささかも愛情をもとめず、ただ、存在への拒絶があるのみである。熟慮されたその拒絶は、哲学的ですらなく、動物的な、そして決定的な性格を帯びていた。死にゆくものがこ

れほどの無関心をもって捨て去る、「生」と呼ばれるせわしなさにしがみついている自分を、ひとは愚かしく思う。オルガは、アルマンをととても愛していた。こんなにも物静かな、そして議論の余地のない、断固たる態度をもって去ってゆくように彼を仕向けているものが何であるのか、オルガにはわからなかった。しかし彼女は、彼の無関心振りのなかに、その決然とした無抵抗振りのなかに、引き込まれていた。それでも彼女は、彼に言った、彼が大好きだと。パリでの最初の仕事は彼のおかげでできたのだと。読むことを教えてくれたのは彼だと。いつしよに、また、でかけましょう、たとえば日本に、あるいはインドに、あるいは大西洋岸に。島の風は、肺にはとてもいいですよ、アルマンはセラニウムの咲く庭に残って……<sup>⑦</sup>。表情の欠如と死への切望は、ドニ・ロッシュがきわめて美しい「ロラン・バルトに宛てたホタルの消滅についての書簡」の中でも想起していることだ。「……」最初に聞いたのは、正面から倒れたのであなたの顔が傷だらけだということです。共通の友人がお見舞いに行ったら教えてくれました。あなたが生命をつなぎとめているチューブに対して「たのむ、抜いてくれ、もうこれは必要ない」とでも言うような身振りをしていることが耐えられなかったと言っていました<sup>⑧</sup>。フランコ・フォルティニと同じく、ドニ・ロッシュもまたこのとき、バルトが数カ月前に小説の題材にしようとしていたパゾリーニの死のことを考えた。「勸善懲惡の小説。はじまりは一種の儀礼的殺人（これを最後に」暴力をすべて厄介払いする）…パゾリーニの殺害犯（釈放されたとと思う）の搜索<sup>⑨</sup>」。ドニ・ロッシュは、「死の中に含まれるつ